

フランスの家庭科教科書における家族・人口記述

河合 務*

Description on Family and Population in Home Economics Textbook in France

KAWAI Tsutomu*

キーワード：家庭科教科書，家族，人口，衛生，「育児学」

Key Words: home economics textbook, family, population, hygiene, 'puériculture'

I. はじめに

本稿は、フランスの家庭科教科書においてどのような家族が描かれ、また、人口と家族がどのような関係をもつものとして論述されたのかという点について検討を行う。本稿は、科学研究費補助金「フランスの初等中等教科書における人口記述に関する歴史研究」（2013～2016年度、基盤研究（C）、課題番号25381026）の助成を受けた研究成果の一部であり、これまで地理教科書、道徳教科書の人口記述の検討を行ったのに続いて¹、今回は家庭科教科書の検討を行うものである。対象とする家庭科教科書は以下のものである。

- ①Moll-Weiss, A., *Le Foyer Domestique*, Librairie Hachette et C^{ie}, 1902.
- ②Lalanne, J. B. et Bidault, *L'Éducation Ménagère à l'École Primaire*, Bibliothèque D'Éducation, 1906.
- ③Roussy, B., *Éducation Domestique de la Femme et Rénovation Sociale*, Librairie Delagrave, 1913.
- ④Boutier, M., *L'Éducation Ménagère*, Librairie Hachette, 1925.
- ⑤Plancherel, J., *La Maison*, Fribourg, 1944.
- ⑥Marduel, F., *Éducation Ménagère Agricole*, Emmanuel Vitte, 1950.
- ⑦Mathiot, G. et De Lamaze, N., *Manuel d'Éducation Ménagère*, E. S. F. et ISTR, 1963.
- ⑧Daney, Ch., *Économie Familiale et Sociale*, Nathan Technique, 1977.
- ⑨Mezonart, L., Bujoc, N. et Dusart, A., *Économie Familiale et Sociale*, Foucher, 1987.
- ⑩Oustalniol, J., Savignac, B. et Charton, E., *Économie Familiale et Sociale*, Nathan, 1990.

フランスの家庭科教育史を概観すると、伝統的に女子教育の一環として行われ、家事や調理など家族生活に密接に関係する分野が取り扱われてきたが、本稿で考察の対象とする20世紀の初頭以降には、家事や調理に衛生（hygiène）という要素を加えることが重視されていく。この時期に盛んに論じられた学校衛生（hygiène scolaire）論との影響関係を視野に収めつつ、学校の衛生化（hygienization）＝医療化（medicalization）の教育史的意義を解明していくことが今後とも課題となるだろう²。本稿は、そうした課題遂行の一環である。

また、乳幼児のケアを扱う「育児学（puériculture）」という分野が家庭科教育に導入されていくことも、この時期の特徴に挙げることができる³。フランスの教科書の内容分析を行ったリンダ・L・

*鳥取大学地域学部地域教育学科

クラークの歴史研究 *Schooling the Daughters of Marianne* では、この「育児学」の女子教育への導入の背景に、フランスの低出生率との関連性があり、出産奨励運動団体「フランス人口増加連合 (Alliance Nationale pour l'Accroissement de la Population Française)」が中心となって発せられ続けた「人口減退 (dépopulation)」言説の影響も指摘されている⁴。この意味で家庭科教科書は、筆者が取り組んできた出産奨励運動史と学校衛生論史の結節点に位置するメディアであるという仮説が浮かび上がってくる。こうした視点から上記の家庭科教科書①～⑩ (以下では「教科書①」「教科書②」、のように示す) を検討していくこととしたい。

II. 家庭科教育の目的と内容

1. 目的

まず、主に教科書①を、副次的に教科書②、教科書④を検討対象としながら家庭科教育の目的を概観しておくこととしたい。教科書①では、家庭科教育の目的を「家政」との関係で定義しようとしている。

「家政 (économie domestique) とは、生活のあらゆる物質的部分に関する科学である。それは、最も限られた資源によって、可能な限り最大のウェルビーイング (bien-être) を生み出すことを目指し、家族の幸福 (bonheur) と繁栄をとまなう。

簡略化するならば、家政とは家庭の科学 (science du ménage) である。」⁵

つまり、家政は生活科学であることを基本とし、また、‘domestique’ と ‘ménage’ は共に「家庭の= (家内的な)」を意味し互換的な言葉として使用されていることが分かる。さらには、家庭科教育の目的に関する次のような直接的な記述もある。

「この授業は、したがって、実際的な生活 (la vie pratique) の概念をあなたがたに与え、学校を出た後あなた自身にとって有用なことをどのように学ぶのかを教え、どうすれば家庭の機能を熱心に遂行することができるのかを教えることを目指している。」⁶

つまり、教科書①に依拠するならば、家庭科教育とは「実際的な生活の概念を提示することによって、将来的に家庭の機能を熱心に遂行することができるようになることを目指す教育」と要約することができる。

教科書①の執筆者 Moll-Weiss は、「家政・衛生に関する自由無償学校」という私立学校の設立者・校長であり、当校は「母親の学校 (École des Mères)」とも呼ばれていたという⁷。こういった特性には留意が必要であるが、公立初等学校の家庭科教育用に書かれた教科書②においても、女子が「家庭の統治 (gouverner sa maison)」を首尾よく行うことで「自分の周りにウェルビーイング (bien-être) を行き渡らせる」ことが家庭科教育の目的として述べられており、教科書①と大差はない⁸。教科書②では、そのために「経済 (économie)」, 「秩序 (ordre)」, 「予見 (prévoyance)」の3つの要素が重要であることが述べられている⁹。

中等教育向けの教科書④では、家庭科教育の目的は「家族に関する義務という観点から若い女性の教育を提供すること」¹⁰、さらには、「熟練した家庭の主婦、腕のいい倹約的な料理人、経験豊かな母親、教養ある教育者、家族の、思慮深くて能力が高く献身的な看護婦 (infirmière) に若い女性

がなるために獲得すべき実際的な知識の教育課程」¹¹だとされている。つまり、家庭科教育は、主婦＝料理人＝母親＝教育者＝看護婦という5つの役割を担う存在へと女性を導くための教育課程だとされている。そして、その教育は、「住居とその維持」、「身体への配慮、衣服、下着」、「栄養摂取と調理の技術」、「育児学と子どもの教育」、「病人と回復期にある者の世話」という区分から構成されると論じられている¹²。

2. 学習内容

教科書①で言われる「実際的な生活」とは、独身生活ではなく家庭生活を中心にしたものである。この点は教科書①から⑩に共通する基本的前提でもある。教科書①の構成としては、「総論」に続き「各論」として「食事（調理）」、「衣服」、「住居」、「病人の世話」、「乳幼児の世話」が学習内容の骨子となっているが、なかでも「病人の世話」「乳幼児の世話」という項目は個人的生活・独身生活ではなく家庭生活に付随する要素である。以下、教科書①の内容にさらに立ち入って検討していくこととしたい。

「総論」部分では、家政の基本として「秩序 (ordre)」, 「活気 (activité)」, 「清潔さ (propreté)」という三要素の大切さが説かれている¹³。「秩序」は「物質的秩序」「道徳秩序」「知的秩序」に枝分かれしており、まず、「物質的秩序」は出費・予算の秩序としての家計の切り盛りが取り扱われている。次に、「道徳秩序」は、「もちろん、父親は外で働き、苦勞して家族に必要なお金を稼ぐ」こと、「この社会は、男性を家長 (chef de la famille) として制度化した」こと、そして、「女性が絶対的女主人 (maîtresse) であることを欲する家族が必要である」という、家父長制的で性別役割分業的な家族が当然視され推奨されている¹⁴。そして、「知的秩序」とは「われわれの諸能力の調和」であるとされ、これは人間の「活気」を生み出す要素であり、女性は自らの諸能力のバランスのよい発達に気を配るばかりでなく、子どもの身体的・道徳的・知的能力の発達に気を配らなければならない、と述べられている¹⁵。子どもの発達に責任をもつ存在としての主婦の役割が強調されている。そして「清潔さ (propreté)」は、「秩序」や「活気」と同様に、すべての家 (maison) に行き渡らせるべき必須要件とされている。「清潔さ」は良き衛生 (hygiène) の条件であり、しばしば道徳上の徴候 (indice) ともなる。そのため、子どもは若い時から清潔さに慣れていく必要があるとも述べられている¹⁶。

具体的には、床、壁、身辺の空気に気を配り、湿気と埃に警戒することの重要性が説かれ、家具、寝具、キッチン、調理用具の手入れ、衣服の洗濯についての解説が続く。そして、身体の「清潔さ」の重要性が説かれ、特に皮膚、髪、爪の手入れが解説されている¹⁷。

「各論」部分では、特に「食事（調理）」の部分が理論編と実習編とで構成され手厚くなっている。火や油の扱い方から始まり、スープ、肉、魚、野菜、卵、デザート、果物、コーヒー、紅茶、ココア、水、牛乳、ワイン、酢、についてそれぞれ解説が行われている¹⁸。この部分は、パン食か米食かという違いを除けば、現代日本での調理の素材や留意点と、さほど異ならないと感ぜられる点が西洋化の進展の証左であるようにも感ぜられ、筆者には興味深い。

「病人の世話」の部分では、清潔な環境を病人に提供することを基本とし、医師の指示に従いながらの服薬のほか、煎じ茶、軟膏、ガーゼの取り扱い、体温の計測・記帳などが論じられている¹⁹。さらに、火傷、出血、虫刺され、失神、呼吸困難などの場合の応急処置も解説され、これらに対応できるように家庭用常備薬を備えることの重要性が説かれている²⁰。

「乳幼児の世話」の留意事項としては、まず、新生児の産着、寝具、寝室の清潔さが述べられ、

次に母乳を基本とし、殺菌済みの粉ミルクによって補われる授乳が言及されている。約1年後から徐々に離乳食としてスプーンも学習内容となっている。そして、乳幼児の器官が未発達で、その完全な発達に果たす母親の役割の重要性が強調されている。子どもには、非の打ち所がないほどの模範を示しなさいとも述べられている。ただ、仕事のために子どもと離れなければならない場合には、当時整備されつつあった託児所や母親学校(＝幼稚園)に預けるという方策にも言及がある²¹。

こうした教科書①の記述は、主に都市生活を営む家族を想定したものだが、教科書⑥は農村の家族が想定されている。1950年に出版された教科書である。農業を営む家族では、女性の役割として、農業に関する夫の補助、家畜の世話、農場の使用人の管理にも言及されている点が都市部の家族とは異なっている²²。

さて、教科書②は冒頭に「総論」部分を置いていないが、「住居」と「栄養摂取(alimentation)」を章立てしているところは教科書①と共通しており、続いて「衛生」を独立の章立てをしている点が教科書①とは異なる。そして、この部分で「新生児の衛生」、「大人の衛生」、「家族の常備薬」について解説している。また、教科書①では強調されていなかった「感染による病気(maladies contagieuses)」にページが割かれている²³。はしか、猩紅熱、天然痘、ジフテリア、腸チフス、結核、インフルエンザ、百日咳、などである。こうした病気との闘いのためには、日頃から住居や身体の「清潔さ(propreté)」に気を配ることと、何よりも医師を信頼し、その指示に従うことが説かれている²⁴。この点、家庭科教育が家庭生活の医療化の推進役として期待されていたという仮説が浮かび上がってくるのだが、それを裏付けるかのように教科書④では、主婦＝母親が看護婦としての役割も担うことが期待されている点が論じられており、さらに「医師の補助者としての主婦」という見出しのもとに、20世紀における衛生の進歩が説かれ、「今日の医師は何よりも衛生家(hygiéniste)であり、主婦は、健康(santé)に貢献するための世話をするのだから、医師の主要な補助者となる」²⁵とも述べられている。

Ⅲ. 人口言説と家庭科教育

本章では家庭科教科書における人口記述について検討を行う。それは教科書③、④において明確に記述されている。公教育省の依頼を受けて執筆された教科書③では、家庭科教育の必要性を論じる文脈において次のように述べられている。

「現在フランスが被っている害悪のうちで、最も恐るべきで、最も憂慮すべきものは間違いなく人口減退(dépopulation)である。」²⁶

この「人口減退」という言葉は、19世紀末以降に本格化したフランスの出産奨励運動において頻繁に使用されており、フランスの人口が減少したわけではないものの、ドイツ、イギリス、イタリアなどの近隣諸国の人口増加に比べると増加率が低いことでフランスが軍事的な劣位に置かれることへの危機意識を中心とし、これに移民増加、植民地経営に必要な人材が得られにくくなることへの懸念とも合わせて第一次世界大戦期から第二次世界大戦期にかけての特に20世紀前半に盛んに論じられた。第二次世界大戦後も移民排斥論とも合流しつつ出産奨励運動は継続されている²⁷。

1913年に出版された教科書③は、「人口減退」という言葉を用いることで、そうした出産奨励運動と危機意識を共有しながら、フランスの出生率の低さと死亡率の高さを嘆き、この人口減退問題の解決に資するものとして家庭科教育の重要性を説いている。家庭科教育は、家庭生活を衛生的に

営む方策を伝授することで、病気を予防し死亡率の低下に資することが期待されている。死亡率の低下、特に乳幼児死亡率の低下は、低出生率の状況下での相対的に希少な子どもの生命を育み、人口増加へとつながるものとの期待が込められていたと考えられる。

こうした見解は、第一次世界大戦後の1925年に出版された教科書④の次のような記述にも表れている。引用しよう。

「ある国は、住民の数と価値の中にしか安全の基礎と繁栄の源泉を見出すことができない。出生率と乳幼児死亡率の危機は、食い止められなければ、国民の生存が問題となる。学校は、そのような危険を前にして無関心のままでいることはできない。育児学 (puériculture) の概念を広めながら、将来的な家族の母を形成するだけでなく、さらに、現在の生徒によって普及させられながら、育児学の教育は家に浸透し、ただちに適用される。」²⁸

このように出生率と乳幼児死亡率の危機は、フランスの国家的問題として位置づけられている。そして、家庭科教育の一角を占める「育児学 (puériculture)」の重要性が、将来の母を形成することと合わせて重要視されることとなっている。

教科書④に設けられた「育児学」という章には「子どもの価値 (valeur de l' enfant)」という見出しのもとに「子どもは家族と祖国の最も貴重な財産 (trésor) を構成する」²⁹と述べられている。‘trésor’とは「財産」であり「宝」をも意味するので、20世紀フランス版の「子宝思想」とも言い得る表現である。この「子宝思想」は上記のような「人口減退」への危機意識を背景にもち、家庭科教育とその一角である「育児学」の重要視をもたらしている。

「育児学」は、「子どもの教育の科学 (science de l' éducation enfantine) であり、子どもを育てる技術 (art d' élever les enfants)」と端的に定義されており、「家族の基礎を築くことにつながるあらゆることと関係を有する」ともされている³⁰。そして、乳幼児を乳母に預ける慣習が、その死亡率の高さから批判され、「母親は自分自身で子どもを育てなければならない」と述べられている³¹。そして、妊娠中から産着、揺り籠、新生児用の部屋の準備を進めながら「子どもの誕生を待つ」ことの重要性が述べられている³²。家庭科教育と「育児学」は、女性を乳母業から遠ざけ自ら育児の担い手として主体化する言説を生み出している。また、このような、乳母業からの女性の引き離しと育児主体化の言説は、初等教育の最終学年向けに書かれた医師 A. ピナールの「育児学」教科書にもみられる³³。ピナールの「育児学」論説は、家庭科教科書③でも言及されている³⁴。

家庭科教育の一分野である「育児学」を人口問題の視点から論じた20世紀初頭の著作としては1901年に出版された『人口減退と育児学』³⁵がある。同書の著者ポール・ストロース (Paul Strauss, 1852-1942) は博愛主義者、児童保護運動家であるとともに出産奨励運動家としての顔を持ち合わせていた³⁶。ストロースは教科書①の序文を執筆しており³⁷家庭科教育とも関係をもった論者でもあるので、彼の言説に少し立ち入って検討・紹介しておくこととしたい。

『人口減退と育児学』においてストロースは、フランスの出生率の伸び悩みを補う意味で乳幼児死亡率を低下させることが重要だとし、それとの関連から墮胎、死産、嬰兒殺、捨て子、乳母業の利用を回避させる方略として「育児学」を通じた女子教育の必要性を説いている³⁸。『人口減退と育児学』では、細菌学者ルイ・パストゥール (Louis Pasteur, 1822-1895) が切り開いた微生物の研究成果を非常に重視している。それは「パストゥール革命 (révolution pastoriennne)」とも呼ばれているが³⁹、それは乳幼児の栄養摂取に際するミルクの殺菌法、食器等の消毒、各種の予防接種など多大な

影響を子どもと家庭生活、そして学校衛生に及ぼす。『人口減退と育児学』の著者ストロースは、「パストゥール革命」のもたらした最大のものを「回避可能な死 (mort évitable)」⁴⁰という概念と捉え、この概念を梃子として乳幼児死亡率を低下させる運動を展開しようとしている。この点で、「育児学」は人口言説の一角に据えられている。

そこで、「育児学」は衛生 (hygiène) を中軸に置いた学問分野として学校衛生論とも関連づけられ⁴¹、また、「清潔 (propreté)」の観念を社会に行き渡らせることを主な目的とすることとなる。「回避可能な死」に直結する「清潔さ」に関して「無知 (ignorance)」でいることは人口減退という視点からは断罪されるべき事態だとストロースは捉えている⁴²。

IV. 「生命の伝達」論

人口言説との関係から 20 世紀フランスの家庭科教科書を考察していくと、避妊による意図的な出生コントロールを非難する 20 世紀初頭における論調は、世紀半ば以降には、それを許容する論調への変化を見て取ることができる。出生コントロールを非難する論調は教科書③に濃厚にみられる。この教科書では、出生コントロールへの非難の意味を込めて「マルサスの教説 (doctrine de Malthus) の影響」にページが割かれ、その内容として、「A. 独身と自由恋愛の有害な役割」、「B. 独身者の大群」、「C. 身勝手で盲目的なエゴイズムを基礎とする夫婦の不道徳性」、「D. 虚飾に満ち、気難しく、金のかかる過度に快楽的な恋愛の有害な役割」、「E. 生活上の複雑さの増大と物価高」が挙げられている⁴³。こうした「マルサスの教説」の紹介は、マルサス自身の教説の骨子から大きく隔たっていると考えられる。つまり、マルサスの言う「道徳的抑制」とは、家族を扶養できるようになるまで結婚を延期し、その間の性的交渉を慎み、結婚後は意図的な出生コントロールを否定するというものであり、むしろ、教科書③には、避妊を推奨した「ネオ・マルサス主義」運動を不道徳だとして攻撃する出産奨励運動のネガティブ・キャンペーンの強い影響がみられる⁴⁴。

しかし、1963年に出版された中等家庭科教科書⑦になると、「女性の衛生 (hygiène féminine)」の見出しのもとに生殖器官、月経、性的成熟、妊娠の解説がある⁴⁵。また、1977年出版の教科書⑧では、20世紀初頭と「現在 (1977年当時)」との家族内の役割分担の違いを比較した表が示され、20世紀初頭には「多子家族 (famille nombreuse)」がしばしばみられたが、「現在 (1977年当時)」では、子どもは一人または数人に減少したと記述されており、「産児制限を行う家族 (famille restreinte)」の定着の様子を見て取ることができる⁴⁶。この表では、20世紀初頭の母親の役割として「家の保全 (entretien de la maison)」と「教育の任務 (tâches d'éducation)」が挙げられているのに対し、「現在 (1977年当時)」では、しばしば外での労働によって収入の重要な一部を確保していると指摘されている。

1987年の教科書⑨では「生命の伝達 (transmission de la vie)」という見出しのもとに、男女の違い、生殖器官、精子、受精、妊娠、胎児の成長、避妊、産児制限、中絶、不妊治療のことが解説されている⁴⁷。1990年の教科書⑩においても「生命の伝達」という章が設けられ、教科書⑨と同様の内容に加えて、性感染症、エイズに関する解説が行われている⁴⁸。もはや、こうしたセクシュアリティに関わる事項を学校で解説する性教育は不道徳だとはみなされなくなるという変化が起こっている。性感染症やエイズに関する解説は、衛生上の配慮からも必要とされていると考えられる。

V. 結び

本稿での考察から、20世紀フランスの家庭科教科書は、家政のあらゆる場面に衛生という要素を

行き渡らせることを基本とし、衛生家としての医師の指示に従って、家庭において医師を補佐する看護婦として役割を女性に期待する言説を多く含んでいた。また、女性は将来的に主婦＝料理人＝母親＝教育者となることも期待されていた。

フランスの低出生率を補う意味で乳幼児死亡率を低下させることで人口増加を図ろうという人口言説の影響が、特に 20 世紀前半の家庭科教科書にみられた。その際、「人口減退 (dépopulation)」という言葉が用いられており、出産奨励運動の影響がみられた。その文脈で「子どもの価値」が言及され、「子どもは家族と祖国の最も貴重な財産」だとする一種の「子宝思想」もみられた。

避妊による意図的な出生コントロールを不道德なものとして非難する 20 世紀初頭における論調から、20 世紀半ば以降には、それを許容する論調への変化がみられ、その傾向は避妊・生殖・中絶などセクシュアリティ全般に関わる事柄から性感染症・エイズの問題の解説まで含めて「生命の伝達」論に収斂してきている。

こうした家庭科教科書の家族・人口記述を地理教科書および道徳教科書と比較してみると、以下のようなことが浮かび上がってくる。

第一に、地理教科書には出産奨励運動の影響が最も希薄であり、とりわけ「多子家族」形成の重要性を述べるような記述はみられなかった。しかし、人口 (population) の国際比較に関する記述が多くあり、移民に関する記述も多いことから、こうした記述を足場にして「多子家族」形成や出生率上昇というトピックへと結び付けられる可能性はあったと考えられる。

第二に、道徳教科書には地理と比べると「家族」に関する記述が多くあり、人口言説としても 1930 年代と 1950 年代の道徳教科書には、子どもを産み育てるという家族の役割、主婦としての女性の役割を強調する記述、早婚を奨励する記述がみられ、人種の永続という記述もあり、これらの総体は出産奨励運動の影響を強く受けていたと考えられる。

第三に、地理や道徳と比べて、家庭科教科書には「家族」に関する記述が最も多いのは当然として、人口言説としても特に 20 世紀前半には出産奨励運動の影響が濃厚にみられた。20 世紀後半には避妊による意図的な出生コントロールを不道德なものとして批判するのではなく、セクシュアリティ全般に関する記述が「生命の伝達」論として解説されるという特徴がみられた。20 世紀の家庭科教科書全般を通して衛生に関する要素が重要視され、看護婦や教育者として女性を主体化しようとする言説がみられた。もっとも、20 世紀の後半には家庭外での労働による収入で家計を支えているという意味で、性別役割分業的な主婦役割への言及は弱まってきている。

注

¹ 拙稿「フランスの地理教科書における人口問題」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第 11 巻第 3 号, 2015 年, 127-138 頁, 同「フランスの道徳教科書における家族・人口記述」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第 12 巻第 3 号, 2016 年, 149-156 頁。

² 拙稿「A. ニューズホームの学校衛生論」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第 12 巻第 2 号, 2015 年, 61-74 頁, 参照。

³ フランスの教育制度全般における家庭科教育の位置づけに関しては中谷圭子「フランスの家政学および家庭科教育の一観察」『家政学雑誌』Vol. 34 (11), 1983, 764-769 頁, 等を参照。

⁴ Clark, L. L., *Schooling the Daughters of Marianne*, State University of New York Press, 1984, p. 83.

⁵ Moll-Weiss, *Le Foyer Domestique*, p.1.

⁶ *Ibid.*, p. 3.

⁷ *Ibid.*, p. XVI. なお, Moll-Weiss の著作には『明日の母親』(*Les Mères de Demain*, Vigot Frères, 1902, 邦訳なし)があり, 女性の身体的・知的発達を論じながら, 最終的に結婚して母親としての役割を果たすことの重要性を説いている。

- ⁸ Lalanne, et Bidault, *L'Éducation Ménagère à l'École Primaire*, p. 164.
- ⁹ *Ibid.*
- ¹⁰ Boutier, *L'Éducation Ménagère*, p. 1.
- ¹¹ *Ibid.*, p. 2.
- ¹² *Ibid.*, pp. 1-2.
- ¹³ Moll-Weiss, *Le Foyer Domestique*, p. 11.
- ¹⁴ *Ibid.*, pp. 31-32.
- ¹⁵ *Ibid.*, pp. 35-42.
- ¹⁶ *Ibid.*, p. 43, p. 50.
- ¹⁷ *Ibid.*, pp. 45-75.
- ¹⁸ *Ibid.*, pp. 181-221.
- ¹⁹ *Ibid.*, pp. 133-140.
- ²⁰ *Ibid.*, pp. 141-148.
- ²¹ *Ibid.*, pp. 149-179.
- ²² Marduel, *Éducation Ménagère Agricole*, pp. 11-12.
- ²³ Lalanne, et Bidault, *L'Éducation Ménagère à l'École Primaire*, pp. 148-163.
- ²⁴ *Ibid.*, pp. 117-133, pp. 157-158.
- ²⁵ Boutier, *L'Éducation Ménagère*, p. 3.
- ²⁶ Roussy, *Éducation Domestique de la Femme et Rénovation Sociale*, p. 5.
- ²⁷ 拙著『フランスの出産奨励運動と教育』日本評論社, 2015年, 参照。
- ²⁸ Boutier, *L'Éducation Ménagère*, p. 4.
- ²⁹ *Ibid.*, p. 273.
- ³⁰ *Ibid.*
- ³¹ *Ibid.*, p. 274.
- ³² *Ibid.*
- ³³ Pinard, A., *Puériculture du Premier Age*, Armand Colin, 1904, pp. 123-128.
- ³⁴ Roussy, *Éducation Domestique de la Femme et Rénovation Sociale*, p. 173.
- ³⁵ Strauss, P., *Dépopulation et Puériculture*, Bibliothèque-Charpentier, 1901.
- ³⁶ 拙著『フランスの出産奨励運動と教育』52-53頁, 参照。
- ³⁷ Moll-Weiss, *Le Foyer Domestique*, préface.
- ³⁸ Strauss, *Dépopulation et Puériculture*, p. 42, p. 49, p. 288.
- ³⁹ *Ibid.*, p. 249.
- ⁴⁰ *Ibid.*, p. 269.
- ⁴¹ *Ibid.*, p. 257.
- ⁴² *Ibid.*, p. 250.
- ⁴³ Roussy, *Éducation Domestique de la Femme et Rénovation Sociale*, pp. 83-89.
- ⁴⁴ 「ネオ・マルサス主義」運動を攻撃する出産奨励運動の言説に関して, 前掲拙著『フランスの出産奨励運動と教育』36-38頁, 参照。
- ⁴⁵ Mathiot et De Lamaze, *Manuel d'Éducation Ménagère*, pp. 11-12.
- ⁴⁶ Daney, *Économie Familiale et Sociale*, Nathan Technique, p.5, p. 7.
- ⁴⁷ Mezonart, Bujoc, et Dusart, *Économie Familiale et Sociale*, Foucher, pp. 39-50.
- ⁴⁸ Oustalniol, Savignac et Charton, *Économie Familiale et Sociale*, Nathan, pp. 51-69.

※本稿は科学研究費補助金「フランスの初等中等教科書における人口記述に関する歴史研究」(2013~2016年度, 基盤研究(C), 課題番号25381026)の助成を受けた研究成果の一部である。

(2016年9月30日受付, 2016年10月7日受理)